



アルビレックス新潟

Albirex NIIGATA

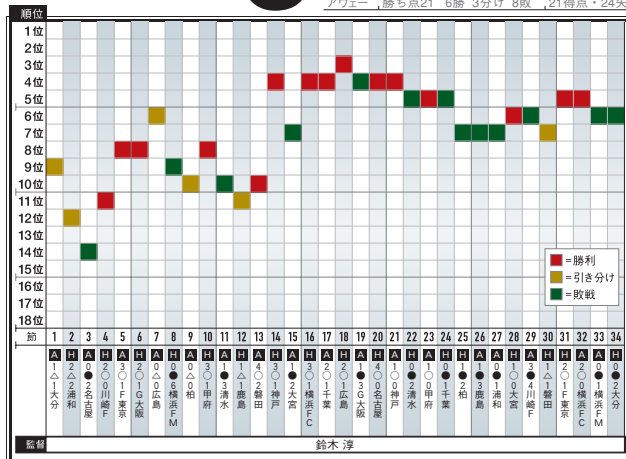
2007年年間順位

6

勝ち点51
15勝 6分け13敗
48得点・47失点・得失点差1
ホーム 勝ち点30 9勝 3分け 5敗 27得点・23失点
アウェイ 勝ち点21 6勝 3分け 8敗 21得点・24失点



©J.LEAGUE PHOTO INC.

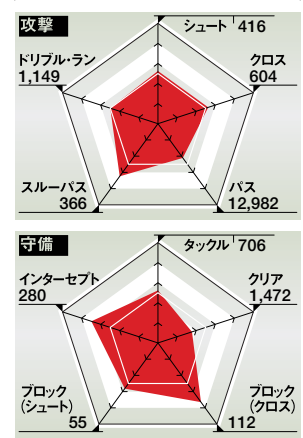


攻守にアグレッシブさ発揮 後半苦しみも目標達成する

鈴木淳監督2年目のシーズンは、ディフェンディングチャンピオンの浦和をホームに迎えた2節、残り3分で2点差を追いつき、勝ち点1をもぎ取って自信と弾みを付けた。4節から6節、16節から18節と前半戦は2度の3連勝。連敗をしない勢いに乗った戦いぶり、夏の中断期間を3位という好成績で迎えた。好調の原動力は新加入のマルシオ・リシャルデス。中盤の右に入ると、右サイドバック内田潤との好連係からチャンスをつくり出した。鈴木監督は前から

ボールを奪いに行き、両サイドバックが同時に上がるのも許容するアグレッシブなスタイルを徹底し、前期快走。しかしシーズンを折り返すと、勢いに陰りが見え始める。両サイドバックの背後をカウンターで突かれるなど守備組織が崩れ、24節から4連敗。最も苦しい時期だった。その中で、チームとしての攻守の動きを再確認。最終的に初めての1ケタ台になる6位でフィニッシュ。開幕前に鈴木監督が掲げた「勝ち点50、7位以内」の目標をクリアした。

レーダーチャート



攻守どちらも多くの項目で平均以上の数値を出しており、ポゼッションを志向しつつ、バランスの取れた機能性の高い戦いを繰り広げてきたことが分かる。また、やみくもにボールをクリアするのではなく、しっかりつないでいくところに、コンセプトが良く表れている

基本フォーメーション



4-4-2の基本システムはシーズンを通して変わらず。先発メンバーも、比較的固定された戦いだった。前期と後期とで大きく変わった点は、左MFの鈴木が大半に期限付きで移籍したこと。そのため坂本が一つポジションを上げて、左サイドバックに松尾が入った

チーム内ランキング

Table with columns for Goals, Passes, Crosses, Dribbles, and Aerial duels, listing player names and their respective statistics.

FIXTURES

Table showing match results for GK, DF, MF, and FW positions, including player names and statistics like goals, assists, and minutes played.

※青番号の●は途中移籍した選手、□は途中加入した選手
※試合=出場試合数、時間=出場時間(分)、スタスタメン回数、
[GK欄] 投入=投入回数、失=失点、失内=失点PA内、失外=失点PA外、
セ=セーブ、セ内=セーブPA内、セ外=セーブPA外、
フイ=フィード、ロン=フィードロング、ショ=フィードショート、
[GK以外] 送出=途中出場回数、ゴ=ゴール、シュ=シュート、
パス=パス、ラス=ラストパス、クロ=クロス、スル=スルーパス、ドリ=ドリブル、
タックル、インタ=インターセプト]

サイドから中央へ、確実性の高いシュート

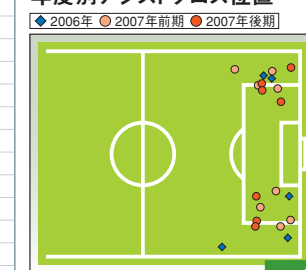
前期は特に、両サイドからの攻撃が機能。クロス成功率で、左の坂本将貴はリーグ2位の34.0%、右の内田潤は同3位の33.9%を誇った [DATA 1]。さらに2トップがクロスの受け手となっており、クロス受け数で矢野貴章がリーグ4位の26本、エジミウソンは同6位の23本を記録 [DATA 2]。サイドと中央のラインがし

っかりつながっていたことが、好調の要因の一つだった。しかし、後期は一転して失速。前期リーグ4位だったゴール数(28点)が、11位(20点)に後退。前期2位のパスAZ比率は6位となる一方、パスDZ比率は12位から7位となった。AZでパスをつなぐことができず、DZに押し下げられてい

る展開が浮かび上がる。年度別のシュート位置 [DATA 3] を見ると、06年トータルではPA外からが多かったが、07年前期はPA外からのシュートが減り、PA内が増えた。確実性の高い近距離のシュート、さらにはゴールが多かった前期の流れを、来季は1年を通じて維持したいところだ。

DATA 1

年度別アシストクロス位置



前期クロス成功率ランキング

Table ranking players by cross success rate in the first half of the season.

DATA 2

前期クロス受け数ランキング

Table ranking players by number of crosses received in the first half of the season.

アシストクロス数は、2007年前期の時点で、昨季最下位だった5本を上回る8本(4位)となった。クロス成功率では、坂本、内田が上位に入り、受け数では、トップ10に矢野、エジミウソンの2名がランクインしている。

DATA 3

前後期別シュート位置



今季のシュート数が減少したのは、特にPA外からシュートのもの。PA内では特に左側部分が大幅に増加している。

高めのライン設定で圧力

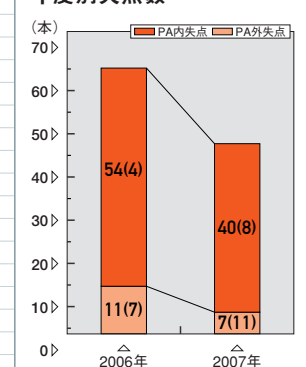
今季の新潟の特徴は、失点が昨年の65から44に減少したことだ。内訳で見るとPA内失点が54から39に72%減り、PA外失点が11から5に、ほぼ半減されている。PA外から打たれたシュートのブロック数がリーグ1位で、ボランチ、センターバックを中心とした集中した守備がゴール前に堅陣を築いた。

また今季加入の千代反田充と、永田充、永田の負傷後は千葉和彦のセンターバックコンビを核とするディフェンスラインと、2人のボランチの間隔の狭さも顕著。昨季12.0mだったDF-MFの間隔が今季は7.8mと、リーグで最も狭くなっている。バイタルエリアで相手に自由に攻撃させない守備を実践した。

DFタックルラインは31.0mでリーグ2位の高さ。全体をコンパクトにしたい意図がうかがえる。ラインを押し上げることによって、前線からボールを奪いに行くアグレッシブな守備を実践したいのが、鈴木淳監督の意図。DF-MFの間隔が狭いことは、ディフェンスラインの背後を破られた際の応急の構えでもある。

DATA 1

年度別失点数



DATA 2

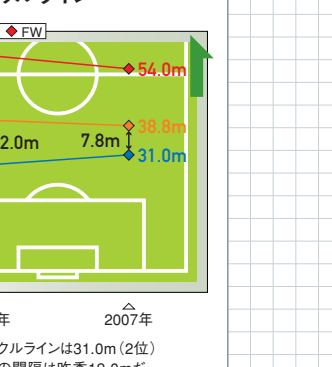
PA外ブロックシュート数ランキング

Table ranking players by number of blocked shots from outside the PA.

ペナルティエリア外でのブロックシュート数は、リーグ1位の20本。

DATA 3

年度別タックルライン



今季は、DFタックルラインは31.0m(2位)と高く、DF-MFの間隔は昨季12.0mだったが、今季は7.8mと一番狭くなっている。